



アリスギアマガジン 読者参加型シナリオ

霞ヶ浦のサンセット

—アリス・ギア・アイギス外伝—

第七話 「希望」

《荒々しくて激情的な曲》を選択

◆櫻井調の部屋

調は感情の赴くままにピアノの鍵盤を叩き付けた。

すると、まるで始めから存在していたかのように、頭の中でメロディが奏でられる。

それと同時にメロディに負けない力強い伴奏が浮かんでくる。

調

（な、なんだ、この感覚は……!?!）

今まで映研が制作する作品のために、数多くのBGMを作ってきた調。

調

（こんな曲、今まで聞いたことがない！）

今、誕生しようとしている今回のテーマソングは、調の中には本来存在しないものだった。

調

（私の中で新たな何かが生まれようとしている!?!）

今まで作ってきた曲は、あくまで過去に聴いたことのある曲がベースとなっていた。

調

（怖い……何かに飲み込まれそうだ……）

メロディこそオリジナリティが高いものとしても、コード展開や伴奏のリズムなどは好きな曲を参考にしてアレンジすることが多かった。

調

（だけど、この先に何か……新しい何かが産まれようとしている……っ!）

しかし心の奥底から生まれる感情が、今まで調の中になかった曲を生

み出そうとしていた。

調

（熱い……胸の奥底から、熱い何かが溢れてくる……！）

普段は同級生達からも一目置かれるほど、クールで頭の回転が速い調。

調

（悔しかった……悲しかったのかもしれない……だけどそんな歪みが新しい私を覚醒させようとしている……っ！）

だけど今の調は、普段の彼女とは真逆だった。

熱くなった感情に身を委ね、頭の中に湧き上がるメロディとリズムに体が支配されていた。

調

（優陽……っ！ 優陽……っ！……！）

◆通学路

調

「曲、できたぞ、優陽」

朝の通学路。

途中で合流し、三人が並んで登校していた時、タイミングを見計らったかのように調が口を開いた。

優陽

「えっ!? 曲って、もしかしてテーマソングの!？」

調

「詞先でも良かったんだが、昨日の晩、曲が降りてきてな」

調は歩きながらカバンからスマホを取り出した。

滯音

「ちょっと! 一応演出やってるんだから、わたしにも聞かせてよ!」

調

「もちろん。今、データ送るから」

調はメッセーシアプリを立ち上げ、二人に曲データを送付した。
二人は慌ててカバンからワイヤレスのイヤホンを取り出し、送られてきた曲を再生する。

優陽

「うわっ！ メツチャ熱っ！」

滯音

「でも、メロディは良い感じ。熱くて素敵な曲だわ！」

イヤホンを通じて聞こえて来たのは、まるで音のシャワー。
まるで二人のピアノ奏者が連弾したかのような、最初から最後までノンストップの荒々しい曲だった。

調

「アレンジする時はギターを思いっきり歪ませて、激しいドラムと合わせるから」

滯音

「これはラストシーン、確実に盛り上がるわ！」

優陽 「うん、間違いないね！ でも……」

優陽はつい口から逆説の言葉を吐き出してしまったが、それを後悔する。

優陽 「……………」

調 「ん？ でも？」

言葉を続けると思った優陽が黙ってしまったので、調はその先を促した。

優陽 「あ、うん。先に謝っておくよ。ゴメンね」

調 「な、なんだよ、優陽？」

気になって聞き返してはみたものの、まさか謝られるとは思わず、焦る調。

優陽 「なんか、しべちゃんっぽくないなあって」

漣音 「あ、それ、わたしも思った」

横から漣音も加わった。

「どうやら漣音も言って良いものかどうか悩んでいたが、優陽に乗かったようだ。」

優陽 「この曲がダメってことじゃないよ!? むしろ、凄く良いと思う。」

ヴァイスに突撃するラストシーンにピッタリだと思うし」

漣音 「うん。これだけ熱いとメツチャ盛り上がるよね！ だけど熱いだけじゃなくって、メロディは凄く綺麗なの」

優陽 「そうそう、そうなんだよ！ メロディが綺麗だからこそ、余計に熱いんだよね！」

漣音 「だけど、この熱さがしべっぽくないんだよね。今までしべの作った曲に、こんな熱い曲なかったし」

優陽 「クールなしべちゃんっぽくはないよね。ビックリだよ！」

調 「……………」

優陽 「あ、ゴメン……………」

漣音 「わ、わたしも……………」

二人が盛り上がっているのを難しい顔で黙って聞いていた調。

だから優陽と漣音は、調が気を悪くしているのではないかと思い、つい謝ってしまう。

調 「いや、怒ってないぞ。むしろ、二人とも凄いなって思った」

優陽 「え？」

漣音 「なにが？」

調 「私のこと、良く分かってるよ。だって私自身、こんな曲が生まれて驚いているんだからな！」

ニコッと笑う調。

その笑顔に優陽と滯音は安堵した。

優陽

「でもね、本当にカッコいい曲だと思うよ！」

滯音

「ギターをギュイーンって入れるんだよね？」

調

「ああ、そのつもり」

滯音

「良い感じになりそうね！ 早く聞きたいわ！」

優陽

「そっかー。この曲がラストシーンで流れるのかー！」

滯音

「ヴァイスの巢へ突撃するところ？」

優陽

「うん。一か八か。もしかしたら無事に戻って来れないかもしれない」

調

「だけど人類を救うため、命を掛けるアクトレス達」

優陽

「その時この歌が流れたら、突撃するアクトレス達もメチャクチャ勇気

出そうだよね！」

ここで盛り上がっていた優陽の表情が固まり、足を止めてしまう。

優陽

「……………」

漣音

「……優陽？」

調

「どうした？」

漣音と調も足を止めて振り返った。

優陽

「そっか。勇気なんだ……………」

優陽は空を見上げながら呟く。

優陽

「ラストシーンでみちるちゃんが歌うのは勇気の歌。激しいけどメロディが綺麗なのは、勇気を伝えるためなんだね」

ギュッと拳を握る優陽。

そんな優陽を見て、調はプツと吹いた。

調 「ははっ！ なるほど、そういう解釈か。うん、いいよ、優陽。さすが

だ！」

激しさの中、確かに存在するメロディは勇気を伝えるモノ。
その解釈に作曲者の調も納得せざるを得なかった。

優陽 「うん、歌詞のイメージ、沸いてきた!!」

漣音 「お、いいね！ 期待してるよ、優陽！」

◆ 帰宅路

優陽 「じゃーん！」

漣音 「え、なに!？」

調 「もしかして、歌詞か？」

漣音 「ええっ、もうできたの!？」

朝、調が作った曲を聴いたばかり。

その日の帰り道、優陽はカバンからノートを取り出すと、得意げにそのノートを開いた。

優陽 「えへへ、授業中に一気に書きちゃった」

漣音 「ええっ!? 授業中に何やってるのよ!」

優陽 「えへへ……」

漣音 「一緒の高校、受験するんでしょ、優陽!」

歌詞ができたのは嬉しいが、喜んで良いのか怒って良いのか複雑な気分の漣音。

調 「まあまあ、いいじゃないか。どれどれ」

調は優陽からノートを受け取ると、漑音も横に並んで覗き込んだ。
そして二人は頭の中にメロディを浮かべながらその歌詞を追った。

漑音 「……あはは、なるほどね」

調 「熱いな。この上なく」

優陽 「うん！ おかげで、あたしのアクトレスに対する想いも整理できたよー！」

それまでの鬱憤が全て消し飛んだかのような、晴れやかな表情を浮かべる優陽。

優陽 「あたしはアクトレスからたくさん勇気をもらっていたんだって」

空を見上げて遠くを見つめる優陽。

優陽

「確かにアクトレスになれないのは悲しかったけど……今はこれまでアクトレスからもらった勇気をみんなに分けてあげたいな、って！」

一歩前にピョンと跳んで振り返る優陽。

優陽の笑みに釣られて、漣音と調も自然と笑顔になった。

調

「そうか。それなら私も必死になって曲を作ったかいがあったよ」

漣音

「……いつか聞かせてくれるんだよね、その整理したっていう想い」

優陽

「うん、もちろん。二人には聞いて欲しいから……この映画が完成して、みんなに観てもらって、全てが終わったら聞いて欲しい」

漣音

「うん、分かった」

調

「それじゃ、まずはこの映画、完成させよう！」

三人は視線を交わし合い、その後、照れ隠して笑い合った。

◆映画研究部部室

優陽 「行くよ、漣音ちゃん！ しべちゃん！」

我先と目的地へと向かって突っ走る優陽。

漣音 「優陽！ あまり無茶しないで！」

漣音と調も優陽に置いていかれまいと後に続く。

その時、調は右前方から何かが近づいてきたのを感じ取っていた。

調 「……っ！ 優陽、2時の方向！」

優陽

「……え!? くうっ!!」

優陽はスラスターを吹かし急ブレーキを掛けた。

同時に持っている銃を構えて撃つ仕草をする。

そう、これはクロマキーの前で三人が演じているラストシーン。

全てを撮り終えた後、グリーンバックのクロマキー背景がカットされ、宇宙空間が合成されることになる。

優陽

「ふう。ありがと、しべちゃん!」

調

「……礼を言うのはまだ早いな。どうやら囲まれたみたいだ」

三人は背中合わせに辺りを見渡した。

ヴァイスに囲まれ逃げ道がない……という絶体絶命のシーンがそれぞれの頭の中に浮かんでいる。

漑音

「あはは、これはキツイね」

優陽

「こんなところで止まるわけにはいかないのにつ！」

その時、三人の通信機を通じて『歌』が流れた。

三人

「「……!?」」

漑音

「これは……?」

優陽

「みちるちゃんの歌だ！」

調

「見ろっ！ ヴァイス達が怯んだぞ！」

『歌』は通信機だけでなく、ヴァイスにまで届いていた！

過去には、シャード内に侵入したヴァイス達が『歌』に怯むというシーンを撮影済みなので、ここで伏線を回収する展開となっていた。

漣音

「……しべー！」

調

「ああー！」

漣音と調は目で合図し、合意する。

漣音

「優陽、行つて！　ここはしべとわたしでなんとかするから！」

優陽

「え……でもっ!？」

調

「行けよ、優陽！　行つて親玉、倒してこい！　それですべて終わり

だー！」

優陽

「……………」

優陽は親友達の顔を交互に見る。

すると二人は黙って頷いた。

優陽

「分かった！」

彼女達の意を汲んだ優陽は、背を向けて一気に飛び去った。

漣音

「カット!!」

演者を兼ねていた監督の合図が部室内に響き渡る。

すると一気にピンと張っていた空気が緩んだ。

泰介

「なかなか良かったじゃん!」

滅多に褒めない泰介が素直に褒める。

みちる

「うん! 感動して泣きそうになっちゃった」

優陽

「えへへ……」

褒められて照れている優陽をよそに、漣音、調、奥井は今のシーンの

動画チェックを行っていた。

漣音

「うん、オツケ!! それじゃあ最後の突撃シーン、行くよ、優陽!」

優陽

「了解! いつでもいいよ!」

クロマキーの前で、優陽がポーズをとる。

漣音

「それじゃあ、シーン311! テイク1! アクション!」

ヴァイスコロニーの中心部へ進む優陽。

そこにヴァイスが進路を塞ぐように次々と現れる。

優陽

「や—————つつ!!」

両手剣を構えると、素早く複数のヴァイスに向かって斬りかかる。

優陽

「とりゃーーーーーっっ!!」

背後からの気配を感じ、振り返り様斬りかかる。

優陽

「まだまだあっ!」

再び中枢に向かって移動を開始する。

しばらく進むと、巨大ヴァイスが待ち構える空間に飛び出した。

優陽

「くうっっ!!」

ラスボスとなるヴァイスが優陽に襲いかかってくる。

その時、『歌』が大サビへと展開した。

同時に巨大ヴァイスに隙が生まれる。

優陽

「今だっ！」

最後の力を振り絞ってライフルを構えると、撃って、撃って、撃ちまくった！

優陽

「これで――、最後だ――――――っ!!」

巨大ヴァイスに向かって突撃しながら両手剣を振りかざすと、力を込めて一気に振り下ろした。

優陽

「はぁ……はぁ……はぁ……」

そして画面はホワイトアウトし……

漣音

「カット！ ちょっと待ってて！」

優陽

「はあ……はあ……」

演技を続けているわけじゃない。

本当に息を切らしていた。

漣音

「うん、オッケー！ これで優陽もオールアップだね！ お疲れ様！」

動画チェックを終えた漣音が優陽を労った。

優陽

「はあ……はあ……ありがとうー！ あとはみちるちゃんのシーンを残すのみだね！」

息を切らしながら、弾けるような笑顔で優陽が応えた。

澤音 「今は……4時5分前か。うん、今から移動すればちょうどいいわ」

泰介 「うおー！ いよいよかあ！ 頑張れよ、みちる！」

みちる 「はい！」

澤音 「それじゃあ、みんな、霞ヶ浦に移動ね！」

◆霞ヶ浦湖畔

映研の部員全員が霞ヶ浦へ移動し、撮影準備が終わるとしばらく休憩となった。

そして霞ヶ浦の空が赤みがかると、いよいよ撮影開始となる。

澤音 「みちる、行ける？」

みちる 「はい、行けます！」

そこにはオドオドしていた、かつてのみちるはどこにもいなかった。

澤音

「それじゃ、カメラ回しておくから、いつでもいいよ」

みちるはコクンと頷くと、霞ヶ浦に向かった。

赤く染まる太陽を前に、みちるは両手を胸にあて、アカペラでゆっくりと歌い出した。

みちる

「♪ボクと誓ったあの日の夢を勇気に変えて　キミがくれた明日への道は希望となった」

みちるは心を込めて歌った。

夕陽の遙か向こうで戦っているアクトレスの優陽を思い描きながら。

調

「良い声してるよ、みちるは」

澤音

「音響監督のお墨付きだもんね」

優陽

「あとでしべちゃん演奏と合わせるんだよね？」

調

「ああ。ドラマチックになるぞ」

優陽

「楽しみ〜！」

三年生組が端でこそそと話していると、やがてみちるの歌が大サビにさしかかった。

それはいいよ優陽が巨大ヴァイスにトドメを刺す場面。

みちる

「♪キミが誓った約束を今胸に抱いて〜 ボクはきつと明日へと歩きだすから〜 キミを迎えに行くために〜」

アカペラは余韻を残して終了した。

みちるは両手を胸に当て、微笑みながら目を瞑る。

しばらくの間、辺りを沈黙が支配していたが……

漣音 「カット！ いいよ、みちる！ 最高だった!!」

監督の漣音が労いの言葉をかける。

みちる 「ホントに？ 良かった〜」

その言葉でホッとしたみちる。

目にはほんのり涙が溜まっていた。

優陽 「あたし、鳥肌立ったよ〜」

調 「ああ、私もだ」

奥井 「……動画もオツケーかな？」

漣音 「うん、大丈夫!」

優陽 「それじゃあ……」

泰介

「うおー、来たか！」

澤音

「……これでクランクアップ、ですっ!!」

監督の終了宣言。

その言葉でそれぞれがそれぞれと視線を交わし……

一同

「「「うおーっ!!」」」

一斉に飛び上がった。

優陽

「みちるちゃん！ 頑張ったねー！」

優陽はみちるへ掛けより、ぎゅーっと抱きしめた。

みちる

「ううー、ちょっと痛いよ、優陽ちゃん……」

優陽

「うわっ、ご、ゴメン！」

強く抱きしめすぎたことに気がついた優陽は、慌ててみちるを解放する。

みちる

「ううん、大丈夫。私、楽しかったよ。ありがとう、優陽ちゃん！」

今度はみちるの方から優陽に抱きついた。

優陽

「ううつ……うわーん、みちるちゃん!!」

みちる

「い、痛いよ、優陽ちゃん……ううつ……」

優陽はまたしても力の限りみちるを抱きしめた。

今度はみちるも優陽の背中に手を回した。

二人は抱き合いながら、嬉しくて泣き合った。



泰介 「……グズッ」

漣音 「あれ、泣いてるの、泰介？」

泰介 「な、泣いてなんかいいよ！ クソ姉貴！」

奥井 「演者の二人にもらい泣きしちゃったんだよね、泰介君。ホント、あの

二人はいいアクトレスになったよ」

調 「ああ、全くだ」

抱きつて泣いている二人を見ながら、部員達はもれなくもらい泣きしてしまふ。

漣音 「……そう、だね」

しかし漣音だけが冷静だった。

奥井の言葉に漣音も心から同意していたが、一方で大きなプレッシャーも感じていた。

◆部室

菜澄那

「みんな、ご苦労様！」

一同が霞ヶ浦から戻ってくると、顧問の伊藤菜澄那が待っていた。

優陽

「菜澄那ちゃん！」

菜澄那

「こーら！ 伊藤先生って呼びなさいとあれほど言ってるのに」

優陽

「えへへ、ごめんなさい伊藤先生」

滯音

「これ、伊藤先生が用意してくれたんですか？」

並べられた机の上に、ジュースと軽食が用意されていた。

菜澄那

「クランクアップ、したんでしょ？ だから先生からのお祝いよ」

泰介

「うおー、マジか！」

調 「ありがとうございます、伊藤先生」

菜澄那 「御礼はナシよ。むしろ私の気持ちなんだから」

漣音 「それじゃあ、みんな！ 遠慮無く頂きましょう！」

一同 「おーっ！」

部員達は一斉に手を伸ばした。

そんな様子を菜澄那は嬉しそうに見つめていた。

◆草野漣音の部屋

喜びの宴も終わり、漣音は自分の部屋に戻って来た。

漣音 「ふー」

漣音は一段落した喜びと疲れ、そしてこれから待ち受ける大仕事に向

けて、盛大なため息をついた。

漚音

「これからが大変だー」

押し潰されそうな不安を払うかのように、わざと軽々しく呟いた。

漚音

「えっと……」

漚音はスマホを手にとると、メッセージアプリを立ち上げた。
そして手慣れた操作で、一気にメッセージを打ち込んだ。

『映画、クランクアップしました。来月の文化祭で上映するので、是非
観に来て下さい！』

漚音

「送信……っと」

漚音

メッセージを送信すると、程なく既読となり、そしてすぐにオッケーのスタンプが送られてきた。

「はやっ!? さすが志保さん」

あまりの返信の早さに漚音が驚いていると、続けてメッセージが送られてきた。

『今度アクトレス番組に出るから宣伝しといてあげる（はあと）』

漚音

「うわー、マジですかあ!? それは少しやり過ぎですって」

そのメッセージは本来嬉しいはずのものだった。

しかし素直に喜べないのは、漚音には大きな仕事が残っているからだ。

滯音

「わたしのノートパソコンじゃ無理だよね……」

部室にあるPCと比較すると圧倒的にスペックが足りない。

これからやろうとする滯音の仕事を見ると、力不足であるのは否定できない。

滯音

「明日から気合いを入れないと」

◆美術準備室

演出を担当する滯音には、編集という重要な仕事が残っていた。

撮り溜めた動画をつなぎあわせ、奥井にエフェクトを発注し合成していく作業。

漚音

「うーん……もう少し間を入れた方がいいかなあ？」

漚音は試行錯誤しながら編集作業を続けていた。

こればかりは自分の仕事とばかりに、優陽と調には先に帰ってもらっていた。

二人もそんな漚音の気持ちを汲んで、先に帰っていた。

奥井

「お疲れ」

漚音

「あ、奥井君」

奥井が大きな体を揺すりながら、漚音が編集作業をしている美術準備室に入ってきた。

奥井 「頼まれていたエフェクト、できたから持ってきたよ」

漣音 「ありがと。助かる」

奥井 「調子はどう？」

漣音 「ぶっちゃけ、行き詰まっている」

漣音は隠すことなく、愚痴混じりに返答した。

たまに優陽から冷やかされることもあったが、基本的に二人の間には全く恋愛感情はない。

PCが詳しいという共通点があるため、互いにアドバイスしあうことはあるが、その感情は戦友に近い。

漣音 「奥井君なら、どう演出する？」

奥井 「方向性としては感動を促すドラマチックな演出にするか、爽快感重視で派手に演出するかだね」

漣音 「そうなの。どっちでいけば良いのか悩んじゃって」

澤音は二つの動画を奥井に見せた。

同じシーンで違った演出を加えたものだ。

奥井

「正直に言って、どっちも良いと思うよ。好み次第だね」

澤音

「……うわああああ！ どっちにすればこの映画、良くなるのかな!?!」

奥井

「あはは、大変だ」

澤音

「その言い方、人ごとだよ」

奥井

「だけどさ」

奥井はチッチッチと立てた人差し指を左右に振った。

奥井

「そうやって悩むのも、凄く楽しいよね?」

澤音

「え……!?!」

奥井

「どっちにするか決まったら教えて。効果的なエフェクト、創るからさ」

奥井は楽しそうに準備室を出て行った。

滯音

「全く……何が悩むのが楽しい、よ。簡単に言ってくれて」

頬をぷうっと膨らませる滯音。

滯音

「だけど……否定できないわ！」

高揚感と共に、ニヤリと笑う滯音。

【選択】そして滞音が選んだのは……？

《A 「絶望感と一筋の希望」といったドラマチックな演出》

《B 優陽が次々と敵を倒していく爽快感に溢れた演出》